View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Okayama University Scientific Achievement Repository

〈書評〉

本村昌文・加藤諭・近田真美子・日笠晴香・吉葉恭行編著

『老い　人文学・ケアの現場・老年学』ポラーノ出版、2019 年

山本　栄美子*

多くの人が各自の人生で経験するであろう「老い」についての見解を、第一線を退いた有名人・知識人たちが当事者として発信するケースは、ここ近年増加している印象がある。「死生学」というフレーズが徐々に浸透してきているように、「死」とは何か、「死」を考えることを題材にした著書や映画は、近年多く見られるようになってきた。

しかし、「死」の前段階である「老い」を生きることについての探究がなされた著作は（単著・共著も含め)、「死」に関する出版物ほど多くは発刊されてはいない。もちろん、予防も含めた認知症に特化したテーマや介護関連の著書、老後資産をはじめ老後の生活に関してテクニカルに教示するもの、老年期のロコモティブシンドロームの予防をはじめとした健康寿命を延ばすことを啓発する書籍、リビング・ウィルなど死を迎える心づもり的なものなど、「老い」を形成する一側面に焦点を当てた具体的なテーマに絞った関連書は数多く出版されている。ところが、そもそも「老いとは何か？」という考察に迫る著書が、超高齢社会に突入して既に 10 年以上が経過しているにもかかわらず、日本では未だそれほど多く発信されていないというのが実状である。

そのような中、まさに「老い」をそのままタイトル名にしたのが本書である。副題として掲げられている「人文学・ケアの現場・老年学」がそのまま本書の特徴を表していると言えるだろう。編者代表の本村昌文による「序」では、日本における「老年学」の特徴や「老い」に関する先行研究について簡単な紹介がなされ、人文学の各分野において「老い」に関する研究は積み重ねられてきていることを明らかにし、「日本の「老年学」において人文学の研究が立ち遅れているというよりは、人文学の各分野からの成果を「老年学」研究と共有する場がほ

* 東京大学人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣死生学・応用倫理講座

とんどなかったところに問題があるのではないだろうか」と指摘している。そうした問題意識から、「「老年学」研究との接点を模索しながら今一度見つめ直し、人文学の各分野からの研究を「老年学」の各分野と共有し得る新たな〈老年学〉研究の基盤を整備することが必要な時期に来ている」とも主張している。

「人文学の各分野からの研究と「老年学」とを架橋する新たな〈老年学〉の創出を目指す」という構想を掲げ、本村を研究代表者として、『老い』の主な執筆者が分担者を務めた、科研費・基盤研究B（特設分野研究「ネオ・ジェロントロジー」）に採択された「ケアの現場と人文学研究との協働による新たな〈老年学〉の構築」（2014～19 年度）の研究に基づく成果が本書である。本村らは、人文学を基幹としたアプローチと解決策を探究する「老年人文学」という学問分野を創出することを長期的目標に据えており、現在も継続して勉強会等を立ち上げ、「老い」に関する議論を重ねる研鑽を続けている。

本書では、多様な「老い」の姿を人文学の分野を中心とした視点から考察がなされている一方、「その考察が人文学の分野に閉鎖されることを打開するためにケアの現場の人びとの意識やそこに生じている問題と関連させ、これまでの「老年学」との接点を見いだすことを試みている」として、単に人文学的視座からの分析にとどまらないのが本書の特徴であると述べられている。

『老い』で扱われる題材は、古代中国から中世西洋、日本の平安時代から現代に至るまで時代や地域・文化圏の対象も多岐にわたり、分析する側の立場も、哲学、宗教学、歴史学、美術史、思想史、日本文学、看護学など多様な分野の人材からのアプローチが章ごと・コラム別に成り立っている。それぞれの章やコラムは、個別の筆者によって考察がなされ完結した記述となっていることから、読者にとっては、各自の関心のあるテーマから「老い」のさまざまな考察を紐解ける構成となっている。

序章と終章を合わせて、全部で計 20 章の多岐にわたるテーマを 3 部に分け、各部のはじめに「総論」を設け、章の間に全体で計 5 つのコラムが挿入される形で、構成されている。1 冊にパッケージされた多様な側面から「老い」を捉える様相は、下記に列挙した、章とコラムのタイトルを一読すれば、十分に把握できるであろう。

序　老い――ケアの現場に根ざした人文学から老年学へ（本村昌文）

第 1 部「現代日本における「老い」」

1 章 ケアと「迷惑」

――なぜ今日の高齢者はこれほどに「迷惑」を口にするのか（諸岡了介）

2 章 訪問看護師と老人専門看護師の老いに対する価値観（工藤洋子）

3 章 高齢者ケアに携わっている支援者の老年観

――看護師、保健師、理学療法士の語りから（近田真美子）

4 章 意思決定と感情の能力（日笠晴香）

Column 在宅医療の現場から――かとう内科並木通り診療所（飯田淳子）

5 章 現代日本における「老い」と科学技術政策（吉葉恭行）

6 章 先端科学技術を活用したリハビリテーションの現状とその可能性（佐治周平）

Column 介護老人福祉施設の現状――仙台「せんだんの里」（柿沼利弘）

第 2 部「変容する「老い」」

7 章 『栄花物語』における「老い」の観念について（小泉礼子）

8 章 『高野山往生伝』に見る老いと死――琳賢の「弥勒像」安置について（佐々木守俊）

9 章 長生きはめでたいことなのか？

――『徒然草』注釈から見る 17 世紀における「老い」の観念（本村昌文）

Column 老いと年齢（山本大介）

10 章 其弊は廃すべし、其制は廃すべからず

――穂積陳重『隠居論』における社会進化と「老い」（石澤理如）

11 章 明治末から大正期におけるメチニコフの「老い」をめぐる言説の受容（島田雄一郎）

12 章 1960 年代以前における献体運動と白菊会（加藤 諭）

13 章 翁童というナラティブ――『フランダースの犬』受容から考える（植村友香子）

第 3 部「「老い」の多様性」

14 章 老いの境界――西洋の知見から（出村和彦）

15 章 中世ヨーロッパの修道院における看取り――ハイスターバッハのカエサリウス『奇跡についての対話』を手がかりに（大貫俊夫）

16 章 「自分が何者であるかも判らない」

――ボーヴォワール『老い』に対する現象学的アプローチ（田中菜摘）

Column 介護者が幸せを求められる社会の実現をめざして（東海林良昌）

17 章 儒家の養老思想およびその現代社会における意義について（任 蜜林、翻訳：龔 穎）
18 章 中国における高齢者ターミナルケアの歴史と現在（周 琛）
Column 老いとは何か（持田恭子）
終章 「老い」をめぐる人文学研究から「老年人文学」へ（本村昌文）

多岐にわたるタイトルからも予測できる通り、各章ごとに、「老い」の多様な側面が各自の専門性に基づいて描かれており、各部のはじめの総論において、各部内の章ごとの論点整理がなされ、読者に読みやすいようにまとめる工夫がなされているものの、章ごとをつなぐ一貫性や、各部ごとの統一性が見いだしにくい点は否めない。とは言え、「老い」という漠然としたテーマのもとで、決して一括りにはできない人文学及びケアの現場にまつわる多様な分野に共通する問題意識を探究するという困難な作業に立ち向かいつつ、4 回に及ぶ論文集編集のための研究会を通して、コンセプトについて意見を交換し合ったプロセスを経て、本書が完成された経緯が、本村による「あとがき」で明かされている。本書の大方の筆者は、自身の研究について予め個別発表を行い、他の研究者からの批評を経た後で再考察したものを文章化して掲載しているということである。そうした、執筆者個人に閉塞されない往還の軌跡に基づいて書かれた文章が、本書の各章・各コラムにおいて展開されている点には、注目されたい。

以下、各章すべてのテーマを書評する才覚は筆者にはないので、特に考えさせられた章や考察のいくつかを取り上げ、全体的に評する視点も交えながら論じることにする。

まず、第 1 章の副題となっている言葉、「なぜ今日の高齢者はこれほどに「迷惑」を口にするのか」に衝撃を受けた。確かに、「できるだけ、迷惑をかけずに残りの生を全うしたい」という心情は多くの高齢者が抱いているものと思われる。その時代背景として、「終活」に関する出版状況からも、「迷惑をかける」ことに対する不安が支配している様子を指摘し、ケアと「迷惑」観念に着目して展開されていく視点は、社会学者である諸岡の専門性が大いに発揮された論考と言える。ただし、本章ではあくまで提起するにとどまっていて、高齢者が抱く「迷惑」観念が解明されたとは言い切れない。その後も、この発想を基に、本村を中心とする研究会における重要な討議事項として引き継がれ、「迷惑をかけたくない」という意識の歴史的・文化的特質を探究する取り組みが継続されていることに、「迷惑」観念の多面的な様相の解明に向けて、大いに期待を寄せるものである。

自明なことを敢えて言うと、『老い』の執筆者たちは、無論、「老い」の当事者ではない研究

者たちである。よって、本書の不足している視点は、当事者目線と指摘することができるだろう。研究者たちは、未だ現実的に「老い」の境地に至れない自らを自覚的に捉えつつ、多角的な「老い」の心情を捉えるにしても、想像力を働かせて描くしかない。いわゆる「老年学」の専門書にありがちな、「高齢者とは、○○○○なものである」といった断定的な記述は、本書では見られないことも特徴的と言えるだろう。当事者目線で語れないことを承知で、そこを踏まえているからこそ、第 2 章・第 3 章のように、当事者に身近に関わる看護師をはじめとしたケア従事者の老いに対する価値観や老年観に着目した記述が、「老い」を迎えることの感覚的にリアルな側面をも語る役割を本書で果たしていると言えるだろう。

第 4 章では、意思決定における感情の能力が価値評価に大きく影響を与えるものとして、従来重視されてきた認知能力に匹敵する、あるいは認識や選択に先行する基盤に据えるべきものとして、より重要視されてよいと主張する論考が展開されている。従来、認知症患者は、本人の意思決定が十分にできない存在として解釈されてきたが、そうではなく、「感情能力を保持する認知症患者は、意思決定の対応能力の最も基礎的要素を満たし得る」と日笠は主張し、従来の前提に批判的見解を呈している。厚労省の「人生の最終段階」に関する指針においても、「本人の最善をいかに考えていくか」が大事とされる昨今、認知症患者の残存能力である感情能力を尊重し、そこから本人意思を読み取るという姿勢がより重要視されるべきなのではないだろうか。本章は、意思決定における前提となる感情能力の重要性を強調する説得力のある論考となっている。

第 5 章では、近年より注目が集まっている「介護・福祉ロボット開発・普及事業」の契機と位置付けられる検討会の協議内容に着目・分析し、関わる省庁の政策的位置づけの違いを明らかにし、介護・福祉ロボットの普及について多様な立場から意見交換がなされた様子が吉葉によって記述されている。産業界・福祉業界との連携を図りつつ、先端科学技術を活かして高齢社会の問題に政策的に取り組むことにまつわる関係性の複雑さが浮き彫りとなり、利用者・介護者の誰のニーズを優先として技術開発を進めていくべきか等、一市民として普段はあまり念頭に及ばない観点が開示されており、高齢社会における産業ビジネスや社会政策が絡んだ上での人間と科学技術の付き合い方について、考えさせられる論考である。

第 9 章で分析された、17 世紀における「老い」を捉える様相が、現代と類似しているように感じられ、人々は「老い」に向き合わず、忘却されていた「老い」として捉えられがちな従来の見方を覆される感覚を覚えたというのが、正直な感想である。「戦乱の世が終わりを告げ、平和な世が到来し、社会秩序が安定し、人々は豊かな生活を送っていくことが可能になった」

と本村が記している17世紀当時の時代背景は、そのまま現代に至る戦後と同様であるとも言える。日本における戦国時代と近代における世界戦争の時代という違いはあるにしても、戦いの世を経た後に訪れる平和な時を迎えてようやく、人々は「老い」に向き合える時間的な余裕を得ることができたのかもしれない。現代の死生学ならびに老年学の台頭と同様、17世紀の日本でも、臨終の大事に着目する風潮があり、そこに「老い」をいかに捉えるかという眼差しが考察されるという流れは、まさに現代と相関する。歴史的な過去を断絶して突き放すのではなく、連続的に捉える大切さを学べる論述となっている。

現代を生きる人たち、ひいては「老い」の当事者には未だ至らない人たちに、生き方のロールモデルとして先人たちの生きざまの一端を教えることができるのは、人文学がその専門性の強みとする歴史における思想の展開を紐解くという視座に基づくものであろう。単に過去の記述にとどまらない、現代との往還性が発揮されれば、より「老い」の多面的な様相を豊かに描き出すことが可能となるに違いない。本書評にて取り上げきれなかった、『老い』に収録された他の論考においても、大いに示唆に富む人文学的視座が発揮されている。そうした人文学と老年学における分野横断的、かつ、過去と現代を照射する歴史における往還性を踏まえた分析が、今後も継続されていくことを大いに期待したい。

本書を通じて、「人文学」と「老年学」を架橋できる「場」が設定されたことは大いに評価できるのであるが、全450頁超の分厚い一冊を通読して若干の物足りなさを感じるのは、各章で考察や課題提起としての文章が完結してしまっている印象が残り、本村が「まだ道半ばの論文集という試み」と称しているように、各自による「老い」の考察が多角的な視点から吟味し尽くされていないという点である。幸い、志を同じくするメンバーで、引き続き「老い」を中心としたテーマを据えて「人文学」と「老年学」の統合的な研究を試みる体制が既に出来上がりつつあり、始動を待つばかりの状態にあるとされていることから、次なる課題として、多様な考察を披見しながらも、各部ごとにおけるテーマ設定や問題意識の統一性が掲げられ、多岐にわたる考察がなされ、整理されていく展開が拓かれていくことを心待ちに願うものである。

「老年期」を「林住期」と表現したのが、宗教学者の山折哲雄である。山折は、人生の区分を、学生期、家長期、林住期、遊行期の4つに分けて、次のように説明する。学生期とは「師について学ぶスネカジリの時代」、家長期は「結婚して子供をつくり家業につく時期」、林住期とは「家庭が落ち着いたあと、一時的に家を出て、やりたいことをやる。飽きたり疲れたり、路銀がつきれば、また家に帰ってくる」時期を指し、「林に住む」と表記されているよう

に、「自由瞑想の時間を含む」。 遊行期は、林住期に入った人間の百人に一人、千人に一人が選ぶ道で、「林住から抜け出て、こんどはたった一人の聖者の道を往く」と分類される。遊行期に至る人間は稀であるとしても、ほぼ誰しもに林住期は訪れるという見解を示している[1]。こうした「林住期」の発想は、「生涯現役」と謳われる世の中にあって高齢になっても勤労しなくてはならない当事者からはそぐわないとの批判を受け兼ねないが、社会のいわゆる第一線を退いて過ごす時期として、今後も多くの人が経験することになる。こうした「林住期」をいかに過ごすかのロールモデルを自分なりに構築していくのが、寿命が延びたと言われる世代を生きる我々に課された課題なのかもしれない。

1980 年代後半以降、「死」に関する書籍の出版が増加していき、人それぞれが死について考え、自分なりの「死に方」を模索していく方向へと向かう、作家の柳田邦男いわく「手作りの死生観」[2]の時代へ突入したとも言われる。「老いとは何か？」という思想・哲学的な問いに関しても、各自がその根本的な意味合いを問う時期を迎えている。1 人 1 人が自分なりの手作りの「老い」を生きる参考軸としても、本書が果たす役割は大きいと言えるだろう。

注

[1] 山折哲雄『涙と日本人』日本経済新聞社、2004 年、223 頁

[2] 作田裕史による島薗進へのインタビュー記事「「現代こそ死者との絆は強い」宗教学者が語る日本人の死生観」『AERA』2018 年 8 月 13－20 日合併号